

国家試験特別教育プログラムによる作業療法学科学生の国家試験への意識および学力の変化

¹ 竹嶋理恵 ¹ 長谷川辰男 ¹ 大関健一郎 ¹ 船山朋子 ¹ 近藤知子 ¹ 椎名喜美子
¹ 鈴木幹夫 ¹ 萩原宏毅 ¹ 本間信生 ¹ 山本涼一 ¹ 小室元政 ¹ 三上眞弘

¹ 帝京科学大学医療科学部作業療法学科

The Ideas of the National Examination and the Academic Ability among the Occupational Therapy Students before and after the Special Exam Preparation Program.

Rie TAKESHIMA¹ Tatsuo HASEGAWA¹ Kenichiro OZEKI¹ Tomoko FUNAYAMA¹
Tomoko KONDO¹ Kimiko SHIINA¹ Mikio SUZUKI¹ Hiroki HAGIWARA¹ Nobuo HONMA¹
Ryoichi YAMAMOTO¹ Motomasa KOMURO¹ Masahiro MIKAMI¹
¹Department of Occupational Therapy, Teikyo University of Science

Abstract : The purpose of this study is to examine how the special self-training program impacts to the students' consciousness of the National Occupational Therapy Examination and their knowledge that relates to the National Examination. The program was developed by and conducted at the Department of Occupational Therapy at Teikyo University of Science. In this program, the students inscribed the 50 exam questions and answers, and the commentary to the CD. The materials were selected from the past exam questions and given to the students. Before and after the program, the questionnaires were given to assess the consciousness of the students about national exam. Trial examinations were also conducted to examine the change of students' knowledge. Forty-three students in the 1st, 2nd and 3rd grades of Teikyo University of Science participated to the study.

In all grades, the students were thinking that the national exam was "very important", "very difficult, and "requires special study". After the program, the ideas of national exam changed. However, the ways of changes were different in each grade. The percentages of correct answers in the trial exams before and after the program were not significantly different for the first and second year of the students. However, for the third grade students, the percentages were significantly raised after the program.

The program had impact to the consciousness of the students toward the national exam. However, it did not directly help to acquire the knowledge to answer the exam questions. Rather, it has a function to raise the awareness of the national exam in the different way in each educational level.

Key words : 作業療法士, 養成教育, 国家試験対策, 学習支援, 自己学習

I. はじめに

ここ数年、作業療法士養成校の数は教育機関の生き残りをかけ激増し、2011年10月時点176校192課程、入学定員は7,250名にのぼる¹⁾。このような現状において、日本作業療法士協会の調べでは、作業療法教育に携わる者の多くが、新入生の確保の困難さと、学生の質の低下を実感している²⁾。また、学生の中には、作業療法の具体的なイメージや作業療法士となることへの強い意志をもたないまま入学し、入学後に進路への迷いや成績不良を示す者も多いという報告がある^{3) 4)}。これらの状況との因果関係は明確ではないものの、ここ数年、作業療法士国家試験合格率は著しい低下を見せている(図I)。

国家試験は医学的な基礎及び臨床知識を問う専門

基礎分野(解剖学、生理学、運動学、病理学概論、臨床心理学、リハビリテーション医学、臨床医学大要)と作業療法に特化した知識を問う作業療法専門分野とに大きく分けられ、それぞれ100問ずつ計200問が出題され、幅広い知識の習得が要求される。作業療法士となるためには、この国家試験に合格しなければならない。作業療法士養成機関にとって学生の国家試験の合格は、優れた作業療法士を育てるために欠かすことのできない目標である。

帝京科学大学は平成20年度に厚生労働省から作業療法士学校養成施設の認可を受けた。同大学医療科学部作業療法学科ではその指定規則に沿ったカリキュラムで教育を行っている。この正規のカリキュラムに加え、今回、学生の国家試験に対する意識と

作業療法士になることへの学習意欲の両方を高めることを目標に、学生自身が国家試験教材作成に関わる形の本学独自の国家試験教育プログラムを実施した。この教育プログラムの受講前後で、学生たちの

国家試験に対する意識と国家試験模擬試験の正答率がどのように変化するかを検証した。

なお、本研究は帝京科学大学「人を対象とする研究等倫理審査委員会」の承認を得て行った。

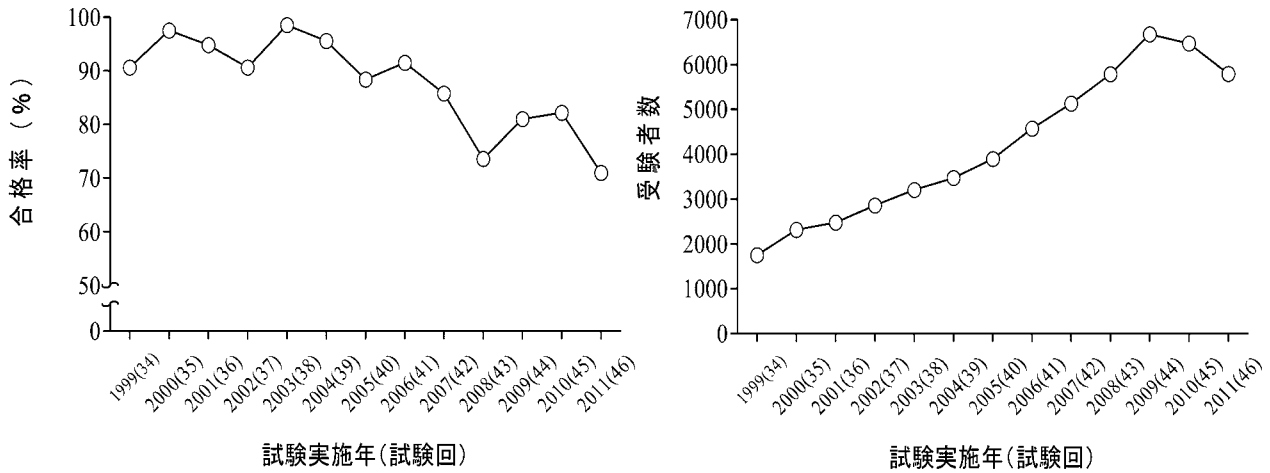


図1. 作業療法士国家試験合格率と受験者数の推移⁵⁾

II. 方法

【対象者】

対象者は、帝京科学大学医療科学部作業療法学科の学生63名(1年生33名、2年生22名、3年生8名)のうち、国家試験対策プログラムに自主的に参加した43名(1年生23名、2年生13名、3年生7名)である。

【方法】

プログラム前後に国家試験に対する意識調査と国家試験模擬試験を行い、その変化を比較した。なお、意識調査と模試は、プログラム希望者だけでなく、学科所属の全学生が受けた。プログラム実施時の各学年の学習状況は、表I-1の通りである。

表I-1. プログラム実施時の学生の学習状況

	専門基礎		専門	
	履修済み科目	履修中科目	履修済み科目	履修中科目
1年生	リハビリテーション概論、医学概論	解剖学、生理学	作業療法技法学	作業療法技法学
2年生	生理学、病理学	運動学、解剖学、内科学、整形外科、臨床神経学、精神医学	作業療法技法学実習	精神障害の作業療法学、日常生活活動
3年生			評価の理解と基本的評価法、活動の評価法、疾患・障害別の評価法、精神障害の作業療法学、日常生活活動	装具・機器の適応評価法、身体障害の作業療法学、発達障害の作業療法学

【国家試験教育プログラムの概要】

本プログラムは学生の自律学習を目指すプログラムである。学生は過去5年間の国家試験問題1000問のうち50問の回答とそれに関連する解説を一定の形式でコンピュータに入力する作業を行う。入力する50問の振り分けは、1年生には専門基礎分野、2・3年生には専門分野の問題の入力が可能なように、学習レベルを考慮して教員が行った。解説の作成には与えられた資料だけでなく複数の教科書や資料を使用することを奨励し、文字数は制限しなかった。また、学生が問題や解答に疑問をもった場合には、教員が解説を行い、学生は場合によってはその

解説をコンピュータに入力した。学生は夏季休業期間中に自らのペースで自宅または図書館でプログラムを行った。

【意識調査および国家試験模擬試験の概要】

意識調査は、国家試験についての知識・関心・難易度・国家試験対策・積極的に勉強すべき分野・勉強方法などを問う質問紙で、マークシート形式の単一選択質問14問、複数選択質問5問から成る(表I-2)。国家試験模擬試験は過去の国家試験問題から1・2年生で修得する専門基礎科目100問のみとし、90分で実施した。

表 I -2. 意識調査の質問項目と結果

1	今までに作業療法士国家試験のことを考えたことがありますか？ 1. 大変よく考える 2. よく考える 3. ときどき考える 4. あまり考えない 5. ほとんど考えない
2	作業療法士国家試験が毎年いつ行われるか知っていますか？ 1. 大変よく知っている 2. よく知っている 3. だいたい知っている 4. あまり知らない 5. 全く知らない
3	作業療法士国家試験の問題数を知っていますか？ 1. 大変よく知っている 2. よく知っている 3. だいたい知っている 4. あまり知らない 5. 全く知らない
4	作業療法士国家試験の試験時間を知っていますか？ 1. 大変よく知っている 2. よく知っている 3. だいたい知っている 4. あまり知らない 5. 全く知らない
5	今までに行われた作業療法士国家試験の問題を見たことがありますか？ 1. 大変よく見ている 2. よく見ている 3. 見たことがある 4. あまり見たことがない 5. 全く見たことがない
6	過去の作業療法士国家試験問題の傾向を知っていますか？ 1. 大変よく知っている 2. よく知っている 3. だいたい知っている 4. あまり知らない 5. 全く知らない
7	作業療法士国家試験はあなたにとって重要なものですか？ 1. 大変重要である 2. 少し重要である 3. どちらとも言えない 4. あまり重要でない 5. 全く重要でない
8	作業療法士国家試験は難しいと思いますか？ 1. 大変難しい 2. 少し難しい 3. どちらとも言えない 4. あまり難しくない 5. 全く難しくない
9	自分は作業療法士国家試験に合格できると思いますか？ 1. 大変自信がある 2. 少し自信がある 3. どちらとも言えない 4. あまり自信がない 5. 全く自信がない
10	作業療法士国家試験のために特別な勉強をする必要があると思いますか？ 1. すごく必要 2. ある程度必要 3. どちらとも言えない 4. あまり必要ない 5. 全く必要ない
11	国家試験対策勉強をするとしたら、どうすればいいか具体的な方法が思い浮かびますか？ 1. はっきり思い浮かぶ 2. ある程度思い浮かぶ 3. 少し思い浮かぶ 4. あまり思い浮かばない 5. 全く思い浮かばない
12	国家試験対策勉強をするとしたら、いつ始めるのがいいと思いますか？ 1. 1年前期 2. 1年後期 3. 2年前期 4. 2年後期 5. 3年前期 6. 3年後期 7. 4年前期 8. 4年後期
13	これまでに国家試験対策勉強してきたとしたら、どのくらいしましたか？ 1. 毎日 2. 週4～6回程度 3. 週2～3回程度 4. 週1回程度 5. 月2～3回 6. 月1回 7. 月1回以下
14	これまでに国家試験対策勉強してきたとしたら、いつから始めましたか？ 1. 1年前期 2. 1年後期 3. 2年前期 4. 2年後期 5. 3年前期 6. 3年後期 7. 4年前期 8. 4年後期
15	国家試験対策勉強をするとしたら、自分はどの基礎分野をより積極的に勉強すべきだと思いますか(複数回答可)？ 1. 数学 2. 国語 3. 英語 4. 生物学 5. 物理学 6. 化学 7. 統計学 8. 倫理学 9. 歴史学 10. 工学 11. 社会学 12. その他
16	国家試験対策勉強をするとしたら、自分はどの専門基礎分野をより積極的に勉強すべきだと思いますか(複数回答可)？ 1. 運動学 2. 解剖学 3. 生理学 4. 内科学 5. 整形外科 6. 臨床神経学 7. 精神医学 8. 人間発達学 9. 病理学 10. 臨床心理学 11. リハビリテーション概論・医学概論 12. その他
17	国家試験対策勉強をするとしたら、自分はどの作業療法専門分野をより積極的に勉強すべきだと思いますか(複数回答可)？ 1. 作業療法概論 2. 作業療法技法 3. 評価の理解と基本的評価法 4. 活動の評価法 5. 疾患・障害別の評価法 6. 器具・機器の適応評価法 7. 身体障害の作業療法学 8. 老年期障害の作業療法学 9. 精神障害の作業療法学 10. 発達障害の作業療法学 11. 日常生活活動 12. その他
18	これまでに国家試験対策勉強してきたとしたら、どのようにしてきましたか(複数回答可)？ 1. 授業をきちんと聞く 2. 授業で学んだことを復習する 3. 臨床実習で学んだことを復習する 4. 分からないことを教員に聞く 5. 分からないことを友人に聞く 6. 過去の国家試験問題を解く 7. 国家試験対策用の参考書を読む 8. 予備校主催の国家試験対策セミナーに参加する 9. 予備校主催の国家試験模擬試験を受ける 10. 友人とグループを作って勉強する 11. 自分で勉強する 12. その他
19	今後、国家試験対策勉強をするとしたら、どのようにしてきますか(複数回答可)？ 1. 授業をきちんと聞く 2. 授業で学んだことを復習する 3. 臨床実習で学んだことを復習する 4. 分からないことを教員に聞く 5. 分からないことを友人に聞く 6. 過去の国家試験問題を解く 7. 国家試験対策用の参考書を読む 8. 予備校主催の国家試験対策セミナーに参加する 9. 予備校主催の国家試験模擬試験を受ける 10. 友人とグループを作って勉強する 11. 自分で勉強する 13. その他

表 II 意識調査における単一選択質問の回答の最頻値

設問番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	(回答者数)	14	(回答者数)		
最頻値	1年生 (n=23)	1回目	3	4	3	3	4	5	1	1	3	1	4	2	7	(19)	1	(18)	
		2回目	3	3	2	3	3	4	1	1	3	1	3	3	7	(23)	2	(23)	
	2年生 (n=13)	1回目	3	3	4	4	3	4	5	1	1	5	1	2	5	7	(13)	3	(12)
		2回目	3	3	3	3	3	3	1	1	3	4	5	1	2	5	7	(13)	3
	3年生 (n=7)	1回目	1	2	1	2	2	3	1	1	3	1	2	4	4	(19)	5	(18)	
		2回目	1	2	1	3	2	2	1	1	2	3	2	2	4	2	3	4	(23)

【意識調査、国家試験模擬試験、およびプログラム実施の手順】

1. 作業療法学科学生全員に第1回目の意識調査を行い、その後、第1回目国家試験模擬試験を行った。
2. 予め募っていた国家試験教育プログラム参加希望者に対し、プログラム実施に先立ち、入力方法などを含む1時間程度のオリエンテーションを行った。
3. 学生は、夏期休業期間中の平成22年8月5日から9月30日までにCDに問題及び解説を入力し、学期明けに担当教員にCDを提出した。
4. プログラム終了後、全学生に第2回目国家試験模擬試験、および第2回目意識調査を行った。

【分析の方法】

意識調査の結果は単一選択質問（設問1～14）では2回の最頻値を比較し、複数選択質問（設問15～19）では選択した学生の人数の変化を分析した。国家試験模擬試験の結果は2回の正答率を比較し、その差について対応のあるt検定を行った。学年により履修していない科目・分野があることから、分析は学年ごとに行った。

Ⅲ. 結果

【意識調査：単一選択質問】

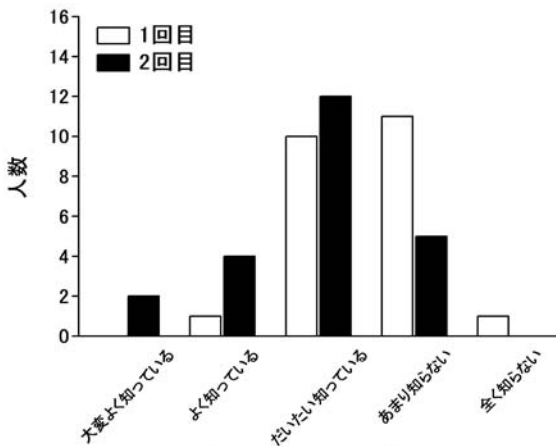
2回の意識調査における単一選択質問の学年別の回答の最頻値を表IIに示す。最頻値が変化した項目は1年生で7項目、2年生で4項目、3年生で6項目であった。最頻値が変化した項目について、それぞれの学年毎にさらに詳細に分析した結果は以下の通りである。

1年生：1年生23人の対象者において7つの設問（設問2,3,5,6,11,12,14）で最頻値が変化した。その内訳には、国家試験の時期を問う設問2で「あまり知らない」(47.8%)から「だいたい知っている」(52.2%)へ、国家試験の問題数を問う設問3で「あまり知らない」(56.5%)から「大体知っている」(30.4%)へ、国家試験問題に触れた経験を問う設問5で「あまり見たことがない」(60.9%)から「見たことがある」(60.9%)へ、過去の国家試験への知識を問う設問6で「全く知らない」(43.5%)から「あまり知らない」(69.6%)への変化がある（表Ⅱ，図Ⅱ-1,2,3,4）。このように学生は国家試験問題に触れる事を通し、試験をより具体的に捉えるようになっていた。

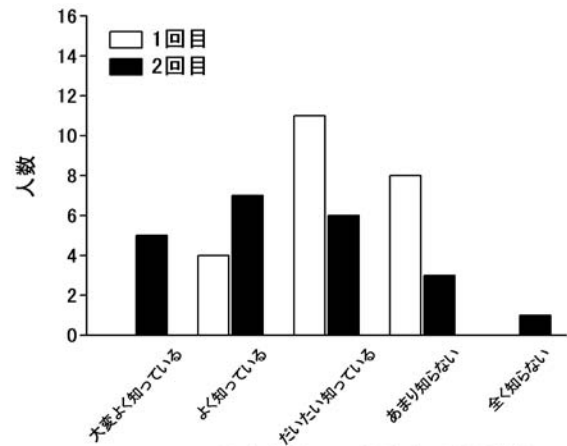
また、国家試験勉強に関して問う設問10から14において、思い浮かぶ対策法を問う設問11で「あまり思い浮かばない」(47.8%)から「少し思い浮かぶ」(43.5%)へ、試験対策勉強を開始すべき時期を問う設問12では「1年後期」(56.5%)から「2年前期」(39.1%)へ、これまでの国家試験勉強の

時期を問う設問14では「1年前期」(47.8%)（無回答21.7%）から「1年後期」(52.2%)（無回答0%）へと最頻値が変化していた（表Ⅱ，図Ⅱ-5,6,7）。つまり、具体的な試験勉強は少し思い浮かぶようになったが、開始や実施に関しては、まだその時期ではないと捉えている傾向が明らかになった。

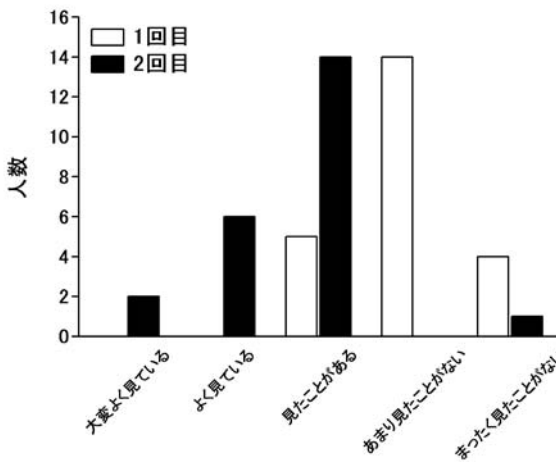
2年生：2年生13名では4つの設問（設問3,4,6,9）において変化があった。その内容は、国家試験の時期を問う設問3、試験時間を問う設問4、過去の国家試験の傾向を問う設問6であり、1回目の「あまり知らない」または「全く知らない」から、2回目の「だいたい知っている」へと変化していた（表Ⅱ，図Ⅱ-8,9,10）。また合格の可能性を問う設問9では、第1回目では「まったく自信がない」が半数を超えていたが（53.9%）、プログラム後は「まったく自信がない」「あまり自信がない」「どちらとも言えない」が同数になる（各々30.8%）という変化が見られた（表Ⅱ，図Ⅱ-11）。このように、2年生では国家試験のイメージがより明確になり、合格に対する



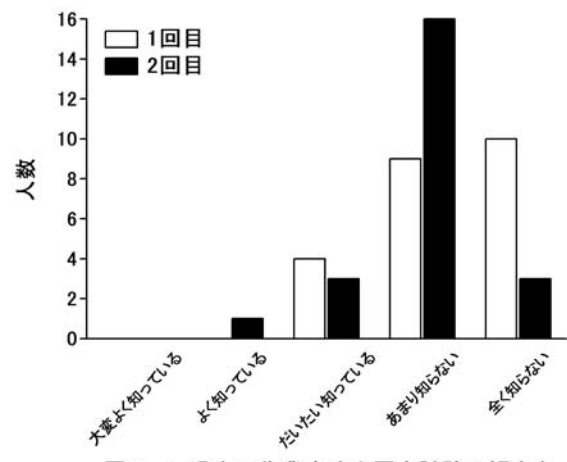
図Ⅱ-1. 作業療法士国家試験が毎年いつ行われるか知っていますか？(1年生・設問2)



図Ⅱ-2. 作業療法士国家試験の問題数を知っていますか？(1年生・設問3)



図Ⅱ-3. 今までに行われた作業療法士国家試験の問題を見たことがありますか？(1年生・設問5)



図Ⅱ-4. 過去の作業療法士国家試験の傾向を知っていますか？(1年生・設問6)

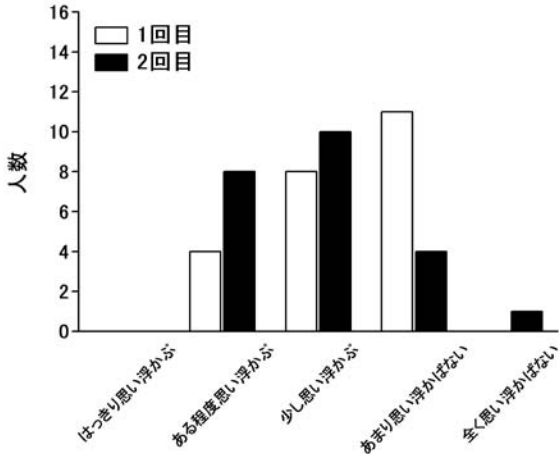


図 II-5. 国家試験対策勉強をしたら、どうすればいいか具体的な方法が思い浮かびますか？(1年生・設問11)

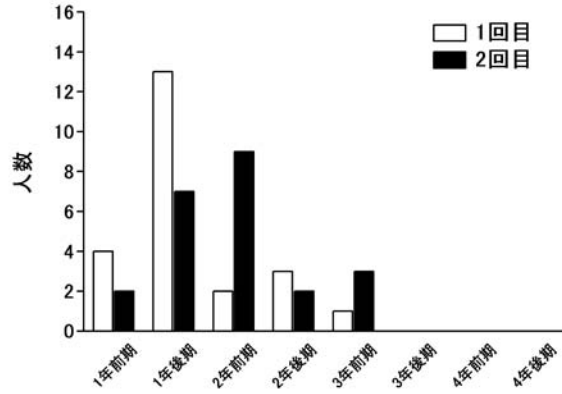


図 II-6. 国家試験対策勉強をしたら、いつ始めるのがいいと思いますか？(1年生・設問12)

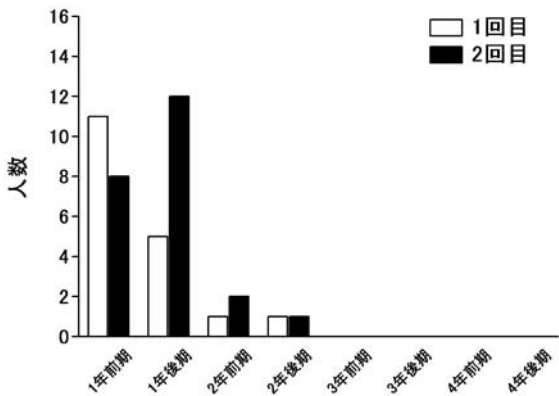


図 II-7. これまでに国家試験対策勉強をしてきたとしたら、いつから始めましたか？(1年生・設問14)

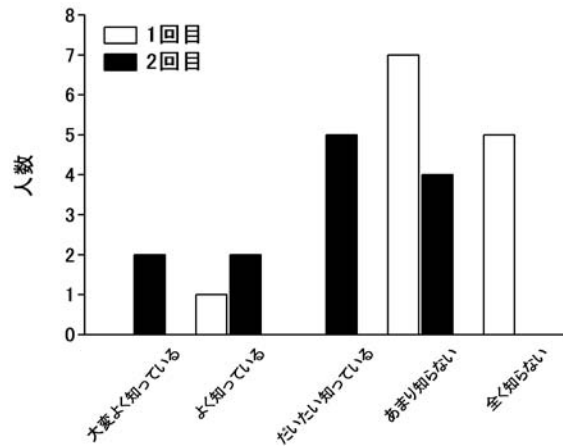


図 II-8. 作業療法士国家試験の問題数を知っていますか？(2年生・設問3)

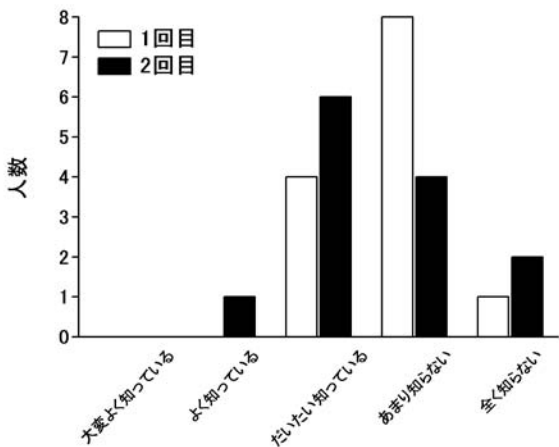


図 II-9. 作業療法士国家試験の試験時間を知っていますか？(2年生・設問4)

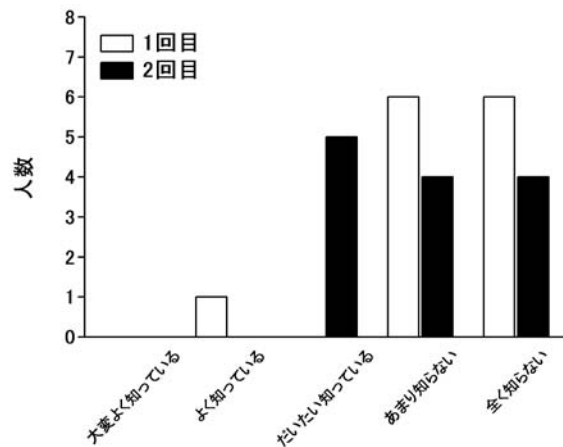


図 II-10. 過去の作業療法士国家試験の傾向を知っていますか？(2年生・設問6)

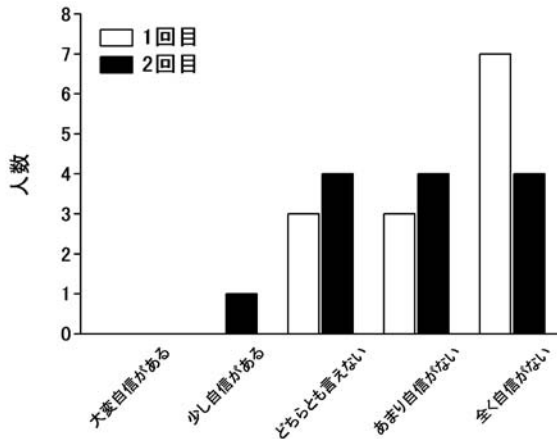


図 II-11. 自分は作業療法士国家試験に合格できると思いますか？(2年生・設問9)

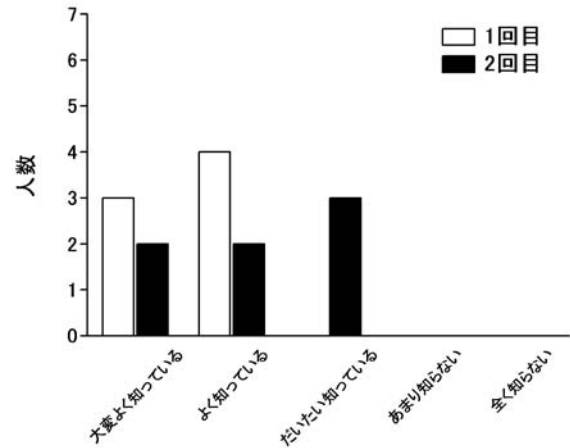


図 II-12. 作業療法士国家試験の試験時間を知っていますか？(3年生・設問4)

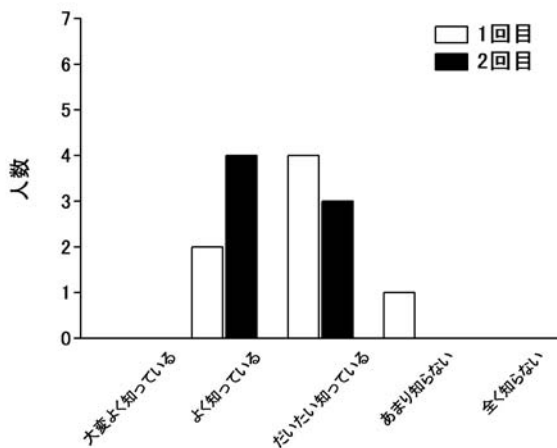


図 II-13. 過去の作業療法士国家試験の傾向を知っていますか？(3年生・設問6)

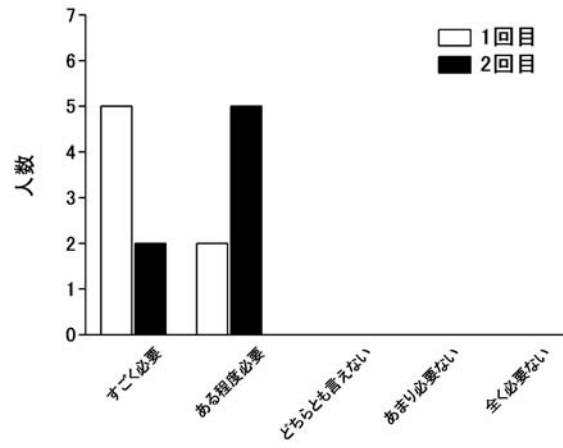


図 II-14. 作業療法士国家試験のために特別な勉強をする必要があると思いますか？(3年生・設問10)

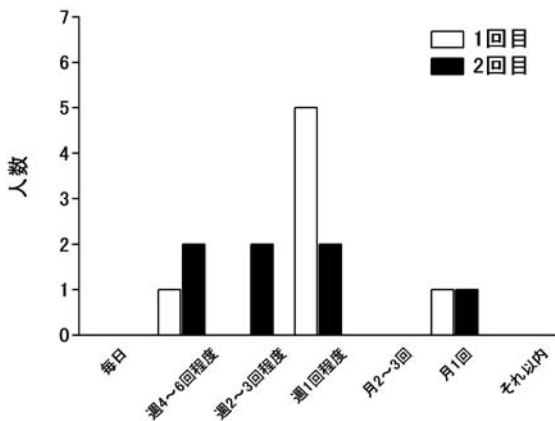


図 II-15. これまでに国家試験対策勉強をしてきたとしたら、どのくらいしましたか？(3年生・設問13)

自信もより肯定的な方向へ変化する傾向が見られた。しかし、国家試験について考える頻度(設問1)は「ときどき」、国家試験問題を見る頻度(設問5)も「見た事がある」程度と変化が無く、また、勉強回数は月1回以下(設問13)、試験対策開始は半年以上先の3年前期で良いとする(設問11)意識も

変わらず、1年生と同様2年生も、「国家試験はまだ先の事」とイメージを抱いている様子が見られた。

3年生：3年生7名では6つの設問(4,6,8,9,10,13)において変化があった。設問6の過去の国家試験の傾向は、「だいたい知っている」(57.1%)から「よく知っている」(57.1%)へと変わり、現在の国家試験勉強の量を問う設問13では「週1回程度」(71.4%)から「週1回程度」「週2~3回程度」「週4~6回程度」(各々28.6%) (図 II-15)が同数になるなど、プログラム後、国家試験への意識を高め、具体的に国家試験勉強を始めていた(表 II, 図 II-13,15)。また、国家試験の難しさを問う設問8での「大変難しい」から「少し難しい」への変化や、国家試験合格の可能性を問う設問9では「どちらとも言えない」から「少し自信がある」と同数へと、試験勉強を「すごく必要」(71.4%)から「ある程度必要」(71.4%) (図 II-14)になるなど、プログラム後、不安が軽減する傾向が見られた。

尚、設問4の国家試験時間に関する問いは、初回

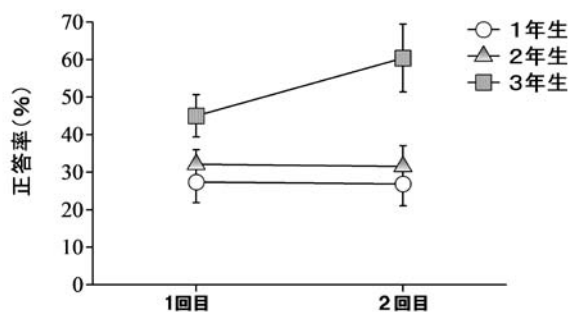
設問 18 (表Ⅲ-4) では、1 年生では 2 回とも「授業をきちんと聞く」が最多だった。2 年生では「授業をきちんと聞く」から「過去の国家試験問題を解く」に変化した。3 年生では 2 回とも「過去の国家試験問題を解く」が最多だった。1 人あたりの平均選択数は 1 年生では 2.6 から 4.0 に増加したが、2 年生・3 年生では増減は 0.6 以下だった。1 年生で 5 人以上増加した勉強法は「臨床実習で学んだことを復習する」「わからないことを友人に聞く」の 2 つであった。

設問 19 (表Ⅲ-5) では、各学年とも「授業で学んだことを復習する」の回答数が多く、前後で変化はしなかった。一方、各学年の回答者数の 20% 以上の増減があった勉強法は、1 年生では「わからないことを友人に聞く」が 34.8% 増加、「国家試験対策用の参考書を読む」が 26.1% 減少、2 年生では「臨床実習で学んだことを復習する」が 38.5% 減少、「わからないことを教員に聞く・わからないことを友人に聞く」が 23.1% 減少、3 年生では「友人とグループを作って勉強する」が 42.9% 減少した。

【国家試験模擬試験の結果】

各学年における 2 回の国家試験模擬試験の正答率の変化を図Ⅲに示す。2 回の正答率の差について対応のある t 検定を行ったところ、1 年生 (1 回目 $27.4 \pm 5.5\%$ 、2 回目 $26.9 \pm 5.9\%$ 、 $t(22) = 0.432$ 、 $p > 0.05$)・2 年生 (1 回目 $32.1 \pm 3.9\%$ 、2 回目 $31.5 \pm 5.5\%$ 、 $t(12) = 0.322$ 、 $p > 0.05$) ではプログラムの前後で正答率に有意差はなかった。また、プログラムに参加しなかった 1 年生 (1 回目 $26.8 \pm 6.1\%$ 、2 回目 $25.9 \pm 5.8\%$ 、 $t(8) = 0.458$) と 2 年生 (1 回目 $32.3 \pm 6.4\%$ 、2 回目 $31.6 \pm 6.0\%$ 、 $t(6) = 0.381$) でも有意差はなかった。

3 年生では、調査に参加したすべての学生の正答率が 1 回目 ($45.0 \pm 5.7\%$) よりも 2 回目 ($60.4 \pm 9.0\%$) の模擬試験で高く有意差が見られた ($t(6) =$



図Ⅲ. 教材作成前後の国家試験模擬試験の正答率の変化

-9.216 、 $p < 0.01$)。3 年生はプログラムで実際に関与したのは専門科目であったにも関わらず、国家試験模擬試験では専門基礎科目の正答率が上がった。

IV. 考察

今回の全学年への 2 回の国家試験の意識調査を通し、学生は学年を問わず、国家試験は自分にとって「大変重要」で「大変難しい」もので、特別な勉強が「すごく必要」であるという意識を持っている事が明らかになった。また、国家試験への合格の可能性についても、1 年生と 3 年生の多くが「どちらとも言えない」、2 年生が「まったく自信がない」と考えるなど、不安な思いを抱えていた。このような共通の意識に対し、今回の国家試験教育プログラムの前後で学年に特有な意識の変化があることも明らかになった。

例えば、1 年生は前期が修了した直後の 1 回目の意識調査では、国家試験の実施の時期も知らず、国家試験問題は見た事がなく、具体的にどのように勉強するのかわからない未知のものであった。しかし、教育プログラムおよび模試受験後は、そのイメージがより明確になった。また、プログラム後はより多くの教科を学び、幅広い学習を進める必要があると考えるようになってきている。勉強方法も、プログラム前から必要だと感じていた、「授業をよく聞く」、「授業で学んだ事を復習する」、「臨床実習で学んだ事を復習するなど」の項目に加え、「友人に聞く」、「友人とグループ学習をする」などの項目を必要だと考える学生が著しく増加した。これは、学習を進める際に自分だけで行なえることには限界があり、友人と助け合う必要があると感じ取った顕われだといえるかもしれない。

一方、選択肢の中の、国家試験の問題を解く、国家試験対策用の問題集を解くなどの項目を選択する 1 年生の数は著しく減少した。国家試験問題は、複合的な分野にまたがって構成されるため 1 年生に与えた問題の中には、1 年生時点ではまだ学習していない分野が多く含まれていた。この結果、プログラムに参加した学生は、現段階では、国家試験の参考書や試験問題に触れるよりは、むしろ日々の授業をきちんと聞く必要があると考えようになったと言えるかもしれない。このように、1 年生にとっては、本プログラムの実施は、知識そのものの獲得というよりは、国家試験への一般的な意識、日々の学習姿勢を振り返り、共に学んでいく仲間への意識を高める効果があったと言える。

2年生でも、プログラム前では、国家試験問題数や試験時間をあまり良く知らず、授業などで国家試験問題に触れた事はあるが、実際には国家試験の傾向などについてはほとんど知らないなど、国家試験に対する一般的知識を持たない学生が多くいた。しかし、プログラム実施後は、国家試験に対する具体的なイメージを持つ者が多くなった。

今回の教育プログラムの、国家試験問題と解説を入力するという作業は、単に国家試験問題に眼を通すだけでなく、問題をじっくり見るという経験を与えることを目的としている。プログラム実施の時点では2年生は、すでに専門基礎科目は殆ど終え、作業療法の専門科目の知識も増え始めており、国家試験問題は、手の届かないものではなく、自分でも解けるはずのものである。このような問題とひとつひとつ向かいあう経験をする中で、国家試験勉強にどのように取り組むのがよいのかを考えられる学生が増えたのではないだろうか。また、そのような経験から、合格の可能性についても、全く自信がないとする学生が最も多かったのに対し、どちらとも言えない、あまり自信がないと肯定的に変化する学生が増えたといえる。

今後の国家試験勉強に対しては、プログラム後は1年生と同様、授業をきちんと聞く、復習をするなどが増えているが、臨床実習の復習をする、教員に聞く、友人に聞くなどという項目を選択するものは減少していた(表Ⅲ)。この背後にあるのは、「大学生活には慣れたが国家試験はまだ先のことである」という意識かもしれない。国家試験について考える頻度や、国家試験勉強は半年以上先に始めればよいという意識、勉強回数は月に1度以下と変化が見られておらず、これらの結果も、「国家試験はまだ先の事である」と考えている2年生意識を反映するものと言えるかもしれない。

反面、普段の学習態度の改善を強調する1年生に対し、2年生は、国家試験模擬試験を行う、参考書を読むなどを選択する者が増え、自分で勉強していく必要性を感じ取る学生が増えていた。また、プログラム実施後は、1年生と異なり、積極的に勉強すべき分野が減少するなど、漠然と広く勉強しようとするのではなく、自分の弱い分野の認識や、問題を関連する分野の理解など、積極的に分野を絞れるようになっていた。

国家試験模擬試験では、2年生の正答率は30パーセント程度に留まり、これはプログラムの終了後にも変化が無い。今回行った国家試験模擬試験のほと

んどが、2年生前期の時点で学習を修了している専門基礎の知識によって解答できる問題から構成されている。これらの問題は、本来ならば、正答できなければならないはずのものであるが、学生は「国家試験はまだ先のことである」という意識を持つ。国家試験合格のためには、これまで行なってきた事を確実に自分のものとしていかなければならない。そのような意識を2年生時点で喚起し、国家試験勉強を開始させるためには、国家試験問題と解説の入力だけでなく、別の形のプログラムが必要となると言えるかもしれない。

3年生はプログラム前より国家試験のことを「大変よく考え」ており、国家試験の時期や問題数、試験時間などをよく知っていて、国家試験対策勉強の具体的な方法について「ある程度思い浮かぶ」と答えていたが、プログラムを経験して「少し自信が持てる」ようになり、実際に勉強の頻度も高くなった。積極的に勉強すべき分野については2年生同様、選択した分野数が平均1分野程度減少しており、どの分野を積極的に勉強すべきかを自覚することができ、「絞り込むことができた」と考えられる。

国家試験対策として行ってきた勉強法は、プログラム前後とも全員が「過去の国家試験問題を解く」を選択しており、今後もこの勉強をするほか授業自体やその復習」をすると回答している。「授業自体やその復習」が大切と考える一方で学年が進むにつれて「過去の国家試験問題を解く」ことが勉強法の中心になっていくと考えられる。

国家試験模擬試験の結果では、すべての3年生がプログラム後の模擬試験で教材作成前よりも正答率が高かったことから、プログラムは3年生の学力向上に効果があった。しかし、模擬試験は、3年生がプログラムで関与した科目ではなく、専門基礎科目から構成されている。つまり、プログラムは、3年生にとっては、知識の獲得に直接影響するというよりは、実際に立ちむかわなければ行けない問題を目の当たりにさせ、勉強への意欲を向上させるという役割をもっていた。そして、このような意識の向上が、得点の向上に結びついたと考えられる。

V. 結論

本研究から、早期からの計画的な国家試験教育プログラムの実施は、国家試験への意識の向上や学習意欲の喚起に役に立つ事がわかった。また、意識や学習意欲の向上は、それぞれの学年で特徴的なものがあることが明らかになった。

国家試験正答率では、1・2年生ではプログラム前後の変化に統計学的有意差はなかった。しかし、3年生では正答率は有意に向上していた。これは、プログラム後、学習意欲を高め、実際に国家試験勉強をより積極的に開始したことによると考えられる。実際的な知識の獲得を目指すためには、今回の教育プログラムに加え、学年に応じた別の形の教育プログラムが必要と言えるかもしれない。

今回見られた学年による効果の違いが、この年度の学生に特徴的なものなのか、あるいは、学年の傾向として顕われた者なのかは確かではない。これを検証するためには、さらなる継時的調査が必要である。

また、今回は学生が「入力に費やした時間・使用した資源」などと「意識・学力の変化」との関連性を調査しなかったが、これらを調査することでより適切な教育プログラムの作成につながるかもしれない。今後、これらの点をふまえ、教育プログラムの開発に努めたい。

本研究は平成23年度教育特別推進研究費を受けて実施した。

VI. 文献

1. 社団法人 日本作業療法士協会：社団法人 日本作業療法士協会ニュース 357：22, 2011.
2. 池田望：本当に作業療法士になりたい学生が減ってきてるんじゃない？社団法人 日本作業療法士協会ニュース 323：12, 2008.
3. 秋山なつ, 岸上博敏, 村田和香：作業療法教育と学生の職業興味における問題点 - VIP 職業 興味検査を用いて - . 作業療法教育研究, 9 (1)：20-26, 2009.
4. 濱野強, 小林毅：作業療法士の養成教育に関する一考察 - 集団アプローチの視点から - . 作業療法教育研究, 10 (1)：33-37, 2010.
5. 理学・作業療法学研究会：ひとりで学べる理学・作業療法士国家試験・共通問題と詳解, 廣川書店, 東京, 2011.